

## 第 13 回高大接続システム改革会議について

2016 年 3 月 11 日に第 13 回高大接続システム改革会議が開催された。

16:00 から 18:00 までの予定で文部科学省 3F 講堂にて行われた。

傍聴者は 150 名程度いたが、傍聴席数が増やされたようでまだ席に余裕はあった。

今回の議題は以下の通りである。

- (1) 学習指導要領等の改訂に向けた検討状況について
- (2) 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の問題作成イメージの例について
- (3) 「最終報告（原案）」について
- (4) その他

まず、議題(1)について事務局より説明があった。

昨年夏の教育課程企画特別部会において取りまとめられた「論点整理」にしたがって、17 のワーキンググループが設置されており、三つの柱（「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体性・多様性・協働性など」）に沿って、育成すべき資質・能力を整理する作業が行われている。駆け足であったが教科ごとの議論の進捗状況について報告がなされた。

16:20 頃からは議題(2)についての説明があった。

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の仕組みについて、複数レベルの問題セットを用意し学校が適切な問題を選択すること、5 段階表示で結果を提供し集団の相対的位置ではないことなどを簡単に再確認した。その上で、国語・数学・英語の 3 教科の問題イメージ例が提示された。これらはあくまで一例であり、このままの形式で実施されるわけではないという注意があった。

国語と数学は 4 題あった。問題例 1 は生活との関わりをより意識させる出題として、現代文の教科書にある手紙文と高校入試に出された広告が題材となった問題であった。問題例 2 はオーソドックスな形式として、高校卒業程度認定試験と神奈川県学習状況調査の問題が紹介された。問題例 3 は義務教育段階の「学び直し」の観点から、高校段階でも確認していくことが必要な事項の例として、全国学力・学習状況調査（中 3）の A 問題が紹介された。問題例 4 は高校段階でも引き続き指導が必要な事項として全国学力・学習状況調査（中 3）の B 問題が紹介された。

これらの問題イメージ例により、既存の問題を積極的に活用していくことと、国語においては同じ問題でも選択式や記述式など解答形式を変更することが可能であることが示されている。

英語では「聞くこと」「読むこと」(2題)「書くこと」「話すこと」の計5題が示され、それぞれにCEFRの規準を設定することによって、その難易度が示されている。

16:40頃より、これに対する委員の意見が述べられた。

基礎学力に幅のある多様な学生がいるので、細やかなテストの作り方がいい、躓いた箇所が把握できるいい方向性である、よくできている、イメージが明確になったなどの意見があり、テストイメージは概ね好評であった。

16:55頃から、議題(3)についての説明があった。

中間まとめをベースにして、これまで議論されたことを加筆・修正して作られたとのことである。「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の記述式導入科目について「国語」と「数学」で実施するものの、『「国語」を優先させる』とか、その採点において『人工知能を活用する』などのように、これまでの議論にはなかったことが盛り込まれている部分も見られたが、それに関する説明は特になかった。

17:25頃から委員の意見が述べられた。

まず全体としては、改革の背景やねらいを誤解のないように、議論を尽くした結果であることを示してほしい、将来のビジョン、改革の目的・目標がわかるように書いてほしいとの意見があった。本会議は実行するためのシステムを考える会議であるとしながらも、理念をメッセージとして継続して伝えたいと要望した。

その他、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」は問題を学校から集めるだけでなく、定期考査など各学校が自由に使えるようにしてはどうかとの提案や、改革を盛り上げるために現場の教員をもっと巻き込んで関わってもらいたいという要望があった。

一方で、具体的な制度設計がはっきりせず早く検討してほしい、採点にAIを使うことは議論していないのでは、全体がわかるような工程表を示してほしいという意見もあった。

最後に、未来の教育のあり方が変わるということは共有されているので、それを解決できるような技術を開発していく必要があると議論をまとめた。

会議は延長し、18:20頃会議終了となった。

次回は最終報告をとりまとめる予定で、開催日程は未定である。